日本キリスト改革派 芦屋教会 月報	2016 年 4 月号 (No.338)

巻頭言 「復活の証人」

宇野 元

ディートリヒ・ボンヘッファーについて書くのはもう三回目になりますね。ボンヘッファーは当時ドイツで著名な医学教授を父として生まれ、知的な環境の中で成長しました。家族はまた芸術を愛好し、彼自身、音楽の道を選ぶことを考えた時期もあったそうです。世界的な指揮者、クリストフ・ドホナーニをご存じの方がおられるでしょう。ボンヘッファーの甥に当たります。ボンヘッファーがピアノを弾き、少年クリストフが横で歌っている写真が残されています。ナチス抵抗運動参画の容疑で家宅捜索を受けたとき、ボンヘッファーは相手の判断をくらませようと、あらかじめ書類を散らしておいたそうですが、いかにも素人的で、不器用さを感じます。ただちに逮捕され、その日のうちに刑務所に連行されます。そして戦争末期には連合軍がベルリンに迫るなか、いくつかの収容所を引き回されたのち、略式の裁判を経て 1945 年 4 月 9 日に処刑されました。

不安と期待が入りまじる時をすごしていた彼に、死の宣告がなされた日は、イースターの次の日曜日でした。わずかな人々が礼拝に集まり、ボンヘッファーが司式と説教をおこないました。聖書の箇所は、イザヤ書 53 章 5 節とペトロの手紙一 1 章 3 節でした。キリストの苦難の意味と、復活によって賜った希望を語る箇所です。ちょうど礼拝が終わったタイミングで二人の人が到着し、裁きの場所に連れてゆくために彼を呼びます。彼は荷物をまとめ、イギリスの友人に伝えてほしいと言って、居合わせた仲間に短い言葉を託しました。それが辞世の言葉になりました。

いよいよ最後です。けれども私にとって命がはじまる時です。

処刑場の近くの教会に彼を記念する石版があり、彼の名につづけて「兄弟たちのあいだでイエス・キリストの一証人」と刻まれています。殉教者と言われ、英雄視されることの多い人ですが、偉大な感じはあまりしません。純粋に「兄弟」と呼べる感じがします。わざわざ貧乏くじを引いたところがあって、人間的にみれば賢いとは言いがたく、いとおしく思います。けれども、きわめて困難な状況の中で、彼は絶望することなく一日一日を歩み、愛する家族に、このときもあなたがたと共に生きます、と書いて送りました（「よき力に守られて」『讃美歌 21』469 番）。静かな忍耐とともに、主イエス・キリストにある確かな望みに生きることを、彼から教えられます。どんなときも、世の片隅に置かれているようなときも、死のときも、私たちの前には命がある。イエス・キリストによる罪のゆるしと永遠の命が与えられている。イースターの恵みを心から感謝いたします。